

宋元期中層『尚書』學の一形態

——朱祖義『尚書句解』をめぐる

陳 佑眞

第一節 通俗經解書の意義

前近代中國において經學は學問の中心に据えられ、儒家經典を家塾等の場でいかにして兒童に學ばせるかは議論の対象となってきた。古くは、程端禮『程氏家塾讀書分年日程』が宋元期の經學教育についての詳細を示す資料と認識されてきた。程端禮は教育者としてきわめて具體的な記述を行っており、ここでは朱熹の學生であつた程端蒙が著した『性理字訓』に始まり、『小學』、四書、『孝經』、五經へと進んでゆく過程が描かれている。程端禮の示した學習行程の特徴は、道學系統の注釋を最重要視し、經書の正文を讀ませた後に直接朱熹『周易本義』や蔡沈『書集傳』へと進む點に求められよう。それゆえ、元人により作られた學習行程でありながら清朝までその有用性は繼續し、乾隆年間には詔勅により各府縣の學校にこの書物が配備されるに至つた。⁽¹⁾

しかし、この書の受容を追ってみると、少なくとも明末清初にはこうした教育課程は特殊なものであつたことがわ

かる。陸隴其がこの書に跋して「及乎中葉、學校廢弛、家自爲教、人自爲學、則此書雖存、而由之者鮮矣。⁽²⁾（中葉に及びて、學校廢弛し、家自ら教を爲し、人自ら學を爲せば、則ち此の書存すと雖も、而れども之れに由る者鮮し）」というように、すべての知識人が程端禮の示したような理想とされる教育を受けてきたかというところではなく、むしろこのような教育を受けたのはごく一部の讀書人に限定されていたというのが實態に近かった。たとえば、清初の有力な道學者の一人、朱澤溪について、年少の頃『讀書分年日程』を利用して學習したことがとりたてて記録されているが、⁽³⁾ そのことは却ってそれが當時の知識人においても決して一般的ではなかったことを如實に示している。

清朝においては翁方綱が「是特俗塾三家邨中授蒙童者、第知有范翔四書體註。語以十三經注疏、則茫然未嘗開卷者⁽⁴⁾（是れ特に俗塾三家邨中の蒙童に授くる者、第だ范翔の四書體註有るを知るのみ。語ぐるに十三經注疏を以てすれば、則ち茫然として未だ嘗て卷を開かざる者なり）」と述べたように、平均的水準の讀書人が學んでいた書物は、今日清朝學術の菁華として連想される戴段二王の學などとは全く異なるものであった。

これは果たして清朝に限定される問題であろうか。馬宗霍氏は經學の歴史的推移を説明する中で、宋末元初の學術の様相について「宋元之交、朱學幾如日中天、亦猶鄭學之於漢魏間也。⁽⁵⁾（宋元の交、朱學幾んど日中の天の如くして、亦た猶ほ鄭學の漢魏の間に於けるがごときなり）」として道學の系統にある元代の經學著作を列擧した。確かに、當時の學問の主流要素をみるに、馬氏の考えはよく當てはまるように思われる。しかし、我々が學術史を考えるに當たっては、我々は社會の公的イデオロギーとして道學が用いられた六百年の後に生まれたのであり、『宋元學案』に代表される道學中心的な價值觀のもとに描かれた學術史が大變強い影響力をもっていることを常に考慮しなくてはならない。

童嶺氏は「精英學問世界」と「庶民（大衆）知識世界」との中間に位置するものとして「中層學問世界」という概念を提示し、隋唐期の學術において、『文選』李善注のような學問界の先端に位置するものと日用類書や識字教科書のようなものとの中間に位置する著作の重要性を主張した⁶⁾。筆者はこの「中層學問世界」という概念は五代以降の經學史においても十分に有効な概念であると考えている。

經學において「中層學問世界」に分類される注釋書は、當然その時代の經學の先端であるとはいえないが、膨大な出版部数を誇り廣く讀まれたという意味で、その時代の多くの讀書人の思想形成に大いに寄與するところがあった。そしてそれは、その時代の一般的な、すなわち大多數の讀書人の經學理解を反映して生まれたものであるともいえるものなのであり、その點において思想上きわめて重要な資料とみなし得る。

現在確認できる『尚書』に對する通俗的な注釋書としては、南宋後期の胡士行『尚書詳解』に遡り、また、それよりやや遅れると思わしきものとして朱祖義『尚書句解』が挙げられる⁷⁾。胡士行『尚書詳解』は特に字詁の方面にきわめて詳細で、一例を挙げれば、堯典の「允恭克讓」に對しては、「允」字の下に「信」、「恭」字の下に「敬」、「克」字の下に「能」という訓が附されており、時に過剰の感を與えるものである。胡士行の書は四庫提要に「雖皆根據舊說、要能薈萃以成一家言、猶解經之篤實者也（皆舊說に根據すと雖も、要するに能く薈萃して以て一家の言を成せば、猶ほ解經の篤實なる者なり）」とあるように、ある程度高い評價を得ていて着目する價值をもつのだが、本稿第二節・第三節で述べる流傳狀況から考えるに、『尚書句解』の方がより多くの讀者を得てきたようである。よって本稿は『尚書句解』を主たる分析對象とし、宋末元初期の經學の一面について些かの考察を試みたい。

第二節 『尙書句解』の流行

内蒙古自治区西端の阿拉善盟額濟納旗の砂漠の中には黒水城という遺跡がある。この土地は曾てシルクロード交易の據點の一つとして發展し、西夏から元の時代に榮えたとされる。一九〇八年から一九〇九年にかけて帝政ロシアの考古學者ピョートル・クズィムイチ・コズロフ(Пётр Кузьмич Козлов、一八六三—一九三五)はこの黒水城遺跡を發掘し、多くの西夏・元時期の文物を見つけた。その後、一九八三年から一九八四年にかけて中國側による發掘調査が行われ、再びある程度まとまった量の西夏・元の文物が發見された。ロシア・中國の發掘結果にはいずれも、數は多くないものの儒家の典籍も混じっている。そのうち中國により發掘されたものの一つに『尙書』の一部と見られるもの(ㄐ一・ㄨ六七)が含まれていることは注目に値しよう。今、李逸友『黒城出土文書』よりその解説を引用する。

『尙書』殘頁、爲右半面、竹紙、二二六×一三八毫米、版心高二二六毫米。粗邊欄、内細欄、現存一三行、大字楷體、徑一〇毫米、欄内雙行小字夾注。⁽⁸⁾

この本には殘葉の圖版(圖版四六頁)も掲載されているが、惠宏氏はこの『尙書』殘頁と題されたものが宋末元初の朱祖義による『尙書句解』であることを指摘した。⁽⁹⁾『尙書句解』には通志堂經解本・四庫全書本以外に元の福建の書肆である敏德書堂による木版本が存在するが、⁽¹⁰⁾黒水城出土のものは敏德書堂本とは異なる刊本である。出土した『尙書句解』の字形は閩本の特徴を有しており、少なくとも元代に二種類の閩本が存在したことが判明する。⁽¹¹⁾一般

的に商業的な出版主體の意向が働きやすいとされる閩本が複数種類存在したという事實からは、『尚書句解』が當時商品として高い價值を認められていた状況の一斑を窺い知ることができる。

また、惠氏は黒水城の漢籍はこの地に赴任した學校教官のものであるという見方を示しており、もしもそれが正しいとするならば、實際に元代には『尚書』の教學においてこの書物が用いられていたということになる。黒水城は元末至正年間頃に周邊の砂漠化等の要因により衰退し、のちに放棄された。内蒙古のこの地域において『尚書句解』を用いた教育が行われたと推定される時期は元代に當たる。

四庫全書は科擧合格を目當てとした郷塾の讀本などの學問的に先端でない書物を存目に置くことが多いが⁽¹²⁾、この『尚書句解』は正式に著録されている上四庫薈要にも採用されており、提要も「隨文詮釋、辭意顯明、使殷盤周誥詰屈聱牙之句、皆可於展卷之下了然於心口。其亦古者離經辨志之意歟（文に隨ひて詮釋し、辭意顯明、殷盤周誥詰屈聱牙の句をして皆展卷の下心口に了然たる可からしむ。其れ亦た古者の離經辨志の意か）」と、『禮記』學記において教育機關でまずなされることとされる「離經辨志」、すなわち經書の章句を分かち、學問の方向性を定めることに擬えるほどに高い評價を下しているのである。

著者である朱祖義については元刊本『尚書句解』の冒頭から彼が盧陵（現在江西省吉安市に屬す）の人であること、字が子由であることが讀み取れる他には殆どわからず、通志堂經解の目録等が元人とするについても裏付けはできない。康熙年間に編纂された『江西通志』卷五十・選舉志二には、理宗の端平元年の擧人として盧陵の朱祖義という人物が擧げられている。この朱祖義が『尚書句解』の著者と同一人物であるとする證據は存在しないが、假に同一人物であるとするならば、端平二年から南宋の滅亡までにはなお四十數年あるから、もし入元時に存命であつたとし

てもかなり高齢であつたものと思われる。四庫提要には朱祖義のことを述べて「於諸經皆有句解、今多散佚、惟此書僅存（諸經に於いて皆句解有り、今多く散佚し、惟だ此の書僅かに存す）」とある。おそらくこれは本稿第四節に擧げる何焯の語に基づくものであらう。同じ朱祖義の手になる『周易句解』は、『經義考』においては「佚」とされている。『周易句解』は森立之『經籍訪古志』に元泰定三年敏德書堂刊本が見られ（現在國立公文書館内閣文庫藏）、江戸期に刊行された和刻本も存在する。なお、朱彝尊が「佚」とすることから所謂佚存書と思われがちだが、清末の文廷式『純常子枝語』卷四に「廬陵朱祖義子由直音傍訓周易句解十卷、怡府精抄本也」とあることから中國にも傳本は存在したことが確認できる。怡親王弘曉は四庫全書館が開かれた際に藏書を提供しなかつた人物であるから、四庫の館臣もその存在を把握していなかつたものと思われる。

第三節 『尚書句解』の版本

簡単に『尚書句解』の版本状況について触れておきたい。先に元には少なくとも二種類の閏刻本があつたとしたが、現行する版本はすべて敏德書堂刊本の系統であり、それは、通志堂經解本及び四庫全書本の缺字と敏德書堂刊本の行格との關係から證明される。

二〇〇四年、中華再造善本經部金元編の一つとして中國國家圖書館藏元敏德書堂刊本が景印出版され、この書物の版本について比較的良好にわかるようになった。現存する『尚書句解』の版本には、完本では敏德書堂刊本、康熙刊通

志堂經解本、文淵閣四庫全書本、四庫薈要本、同治鍾謙鈞覆刊通志堂經解本の五種が挙げられる。通志堂經解本の底本は、この敏徳書堂刊本であると確定できる⁽¹³⁾。通志堂經解本には少なくない墨釘があるが、通志堂經解本と敏徳書堂刊本とを對比すると、通志堂經解本が墨釘に作る文字の大部分は敏徳書堂刊本における行頭に偏在しており、しかも中華再造善本景印本によって見てみてもその部分は版木の磨耗や缺損により、文字の確認が著しく困難であることが多いのである。

また、文淵閣及び薈要二種の四庫全書本の底本は敏徳書堂刊本ではなく通志堂經解本であると思われる。その根拠は二つある。第一に、四庫全書本では底本で判讀困難な部分を缺字に作るか、或いは意を以て文字を埋めることがあるが、その位置が通志堂經解本とすべて一致する。勿論四庫全書本は通志堂經解が底本とした同一印本の敏徳書堂刊本を底本としていて、その判讀不能とされた部位は通志堂經解と全く同じであった可能性も理論上は考えられる⁽¹⁴⁾。しかし、一般的に版木の磨耗というはある文字が全く見えなくなるか完全に見えるか、という状態になることはあまり多くない。假に通志堂經解の刊行者と四庫全書の館臣とが見たものが同一の印本であったとしても、判讀不能と判断する部分が完全に一致する可能性はあまり考えられないのではなからうか。

第二に、金滕篇「爲三壇同壇」注の字格の問題が挙げられる。敏徳書堂刊本では「坐北面南以禮三王」となっている部分を通志堂經解本は「坐北面南以禮□□王」として「禮」と「王」との間に二格をあけている。四庫全書本はというと、文淵閣本・四庫薈要本共に「禮缺□王」としており、通志堂經解本と同じように二格をあけているのである。

また、同じ金滕篇「惟爾元孫某」注「惟爾三王之長孫某」について、通志堂經解は「□示三王之長孫某」に作る。これは敏徳書堂刊本が「爾」を「尔」と表記した結果として形訛をきたしたものであるが、四庫全書本二種も共に通

志堂經解と同じく冒頭二字を「缺示」に作るのである。思うに、敏德書堂刊本の注文は俗字を用いることが多く、「爾」の俗體「尔」も全體を通して頻見する。つまり通志堂經解本がこの部分についてのみ誤って「示」としたのは全く偶然に係るのであつて、四庫全書は通志堂經解本を底本とするのでなければ共通する誤字をもつ理由が説明できない。

第四節 『尚書句解』の經解内容

本節においては『尚書句解』の經解上の特徴、特にその經說の來源について論じたい。

筆者の管見の限り、『尚書句解』の注釋上の性質について言及した最も早い記述は何焯による通志堂經解への批語である。翁方綱により編集された『通志堂經解目錄』には次のように何焯の言葉が引用されている。

何焯曰、六經皆有句解、不過節略舊注、非另出手眼者。⁽¹³⁾

何焯曰く、六經皆句解有り、舊注を節略するに過ぎずして、另に手眼を出す者に非ず、と。

これは『尚書句解』に對する批判的な言及であり、四庫提要の示した高い評價と論調を異にするが、舊注の節略に過ぎない、という指摘は概ね的確である。『尚書句解』一書は、堯典の冒頭において林之奇の說を引用してそれを批判するところなどごく一部の例外を除き、殆ど他の『尚書』注釋者の名前を提示しないが、實際にはその經說には出處を確認できるものがきわめて多いのである。

具體的には、朱祖義が利用した先行經說は、孔傳・孔疏・蘇軾『書傳』・林之奇『尚書全解』・黃倫『尚書精義』な

ど多数にわたるが、夏僎『尚書詳解』が大部分を占めている。⁽¹⁶⁾ いくつか具體的に、朱祖義が舊説を利用した過程を追うことのできる例を挙げれば以下の通り。

(一) 舜典「玄德升聞」の「玄德」について、夏僎は直前の「濬哲文明温恭允塞」の一字ずつが舜の徳を言い表したものだとして、「八者即玄德」とし、朱祖義もこれに従う。

(二) 高宗彤日について、夏僎は鼎に鳥が停まることを『毛詩』周頌・絲衣から祭祀の翌日の場面を復元して説明するが、朱祖義もこれに従う。なお、絲衣を用いた考證は注疏や蔡傳には見られない。

(三) 牧誓「牝雞之晨、惟家之索」について、注疏や蔡傳は「索」を家の命運が盡きることと解するが、夏僎は、「家必索而盡」とし、見つけて處分しなければならない、とする。朱祖義は夏僎に従う。

以上は夏僎の説にほぼ完全に依據した上で文面の簡略化を圖つたもので、『尚書句解』の中核をなすのはこのような、夏僎らの先行する注釋書の文を節略して作られたものであつて『尚書詳解』・『尚書句解』の兩書を並べて開くとこのような例は容易に見見することができると。

ほか、朱祖義は先行注釋を節略するに當たつて、必ずしも一つの注釋書を基礎とするとは限らず、數句ごとに異なる注釋書を節略して文章を構成する場合もあり、そのことは結果として前後矛盾や體例の不統一をもたらす場合がある。まず禹貢の例を示したい。

『尚書句解』卷三・禹貢・豫州

伊洛瀍澗、

「句解」伊出今汝州南陽縣荀渠山、洛出今商州洛陽東北、澗出今西京新安縣穀城山、澗出今西京龜池縣白石山。

伊は今の汝州南陽縣の苟渠山に出で、洛は今の商州洛陽の東北に出で、瀍は今の西京新安縣の穀城山に出で、澗は今の西京龜池縣の白石山に出づ。

既入于河。滎波既瀦、導荷澤。

〔句解〕荷澤在今廣濟軍定陶縣東北。然後導荷澤之水。

荷澤は今の廣濟軍定陶縣の東北に在り。然る後荷澤の水を導く。

被孟瀦。

〔句解〕以荷澤水盛、乃覆被於孟瀦澤。孟瀦在梁國睢陽縣東北。

荷澤の水の盛んなるを以て、乃ち孟瀦澤に覆被す。孟瀦は梁國睢陽縣の東北に在り。

禹貢は古來難解な篇として知られるものであり、それをわかりやすく解釋するのは困難である。ここでは朱祖義は、「伊洛澶澗」及び「既入于河滎波既瀦導荷澤」の句解を夏僊『尚書詳解』や毛晃『禹貢指南』に基づいて作成したにもかかわらず、「被孟瀦」の句解を『尚書正義』に基づいて作成したために、六朝隋唐期の地名と宋代の地名とが並立する形となり、結果として奇妙な注釋を作り出してしまっている。

次に擧げる泰誓の問題は更に深刻である。

泰誓三篇は武王が殷を討伐する兵を興したことを述べる篇であるが、そのことが起きた日時については古來議論の紛糾してきた問題である。最初にこの問題の争点について簡単に整理すると次のようになる。

泰誓の序には、「惟十有一年、武王伐殷。一月戊午、師渡孟津。作泰誓三篇（惟れ十有一年、武王殷を伐つ。一月戊午、師孟津を渡る。泰誓三篇を作る）」とある。この文章をそのまま讀むと、武王の軍隊は文王受命十一年の一月

戊午に孟津を渡った、ということになるだろう。

ところが、泰誓上の經文には、「惟十有三年春、大會于孟津（惟れ十有三年の春、大いに孟津に會す）」とあり、序の文章と矛盾するのである。特にこれは武王が殷をいつ滅ぼしたか、というきわめて重要な出來事の紀年に關わる問題であることから、古來經學上の一大問題とみなされてきた。

この問題に對する解決策は議論百出であるのだが、きわめて大雑把に分類すると二つの方向性を見出すことができる。第一に、どちらの文章にも誤りがないものとし、序と經とは二つの個別の事柄を述べている、と考えるもの、第二に、どちらかに誤字が存在するものとし、序と經とは一つの同じ事柄を述べている、と考えるものである。歴史的には前者には孔安國（僞孔傳）・孔穎達らが屬し、後者には歐陽脩『居士集』卷十八・泰誓論・夏僎・蔡沈・陳經らが屬す。

では、朱祖義はこの部分にどのような注釋を施したのであろうか。まず、序に對する注釋は次のようなものである。

『尚書句解』卷六・泰誓上

惟十有一年、

〔句解〕周自虞芮質成、諸侯竝附、文王遂受命稱王。至九年、大統未集而卒。武王三年服畢、乃於十有一年。

周は虞芮成を質して自り、諸侯竝びに附し、文王遂に命を受けて王を稱す。九年に至り、大統未だ集まらずして卒す。武王三年の服畢り、乃ち十有一年に於いて。

武王伐殷。

〔句解〕武王喪畢、始伐殷。觀兵孟津、以卜諸侯伐殷之心。諸侯僉同、乃退以示弱。

武王喪畢り、始めて殷を伐つ。兵を孟津に觀、以て諸侯の殷を伐つの心を卜ふ。諸侯僉同じなるに、乃ち退きて以て弱きを示す。

一月戊午、

〔句解〕至十三年正月二十八日戊午。

十三年正月二十八日戊午に至りて。

師渡孟津。

〔句解〕更與諸侯期會、以師衆渡孟津、而共伐紂。

更めて諸侯と期して會し、師衆を以て孟津を渡り、共に紂を伐つ。

ここにおいて朱祖義は、「更めて諸侯と期して會し」の語からも明らかなように、孔傳・正義と同じ方向の理解に立っている。さらにはこの部分は孔傳の文章を殆どそのままに書き寫して少し説明を付け加えたものであることが明らかである。孔傳は次のようにこの部分を解している。

『尚書』卷六・泰誓上

惟十有一年、武王伐殷。

〔孔傳〕周自虞芮質厥成、諸侯并附、以爲受命之年。至九年、而文王卒。武王三年服畢、觀兵孟津、以卜諸侯伐紂之心。諸侯僉同、乃退以示弱。

周は虞芮厥の成を質して自り、諸侯並びに附し、以て受命の年と爲す。九年に至り、文王卒す。武王三年の服畢り、兵を孟津に觀、以て諸侯の紂を伐つの心を卜ふ。諸侯僉同じなるに、乃ち退きて以て弱き

を示す。

一月戊午、師渡孟津。

〔孔傳〕十三年正月二十八日、更與諸侯期、而共伐紂。

十三年正月二十八日、更めて諸侯と期し、共に紂を伐つ。

しかし、經文に至ると問題が生じる。經文の句解は以下の通り。

惟十有三年春、

〔句解〕正月戊午。卽是序所謂十有一年一月戊午也。前言十一、此言十三、蓋傳寫之誤也。

正月戊午なり。卽ち是れ序に所謂十有一年一月戊午なり。前に十一と言ひ、此に十三と言ふは、蓋し傳寫の誤りなり。

こちらでは序が「惟十有一年」とするのは「傳寫の誤り」であると斷じ、前後の注釋の間に矛盾を生じているのである。

序の「十有一年」に誤字を疑うのは歐陽脩以來宋代には往々にして見られる說であり、蔡沈もその立場に立っている。しかし、この文章を見る限り、これは夏僎『尚書詳解』に直接基づくものと見るのが適切であろう。この經文に對する夏僎の說は次のようなものであり、その文章の類似から踏襲が疑われるのである。

此十三年春、卽序所謂十有一年一月戊午也。前言十一、此言十三、必傳寫之誤、前辯之詳矣。

此れ十三年の春、卽ち序に謂ふ所の十有一年一月戊午なり。前に十一と言ひ、此に十三と言ふは、必ずや傳寫の誤なること、前に之れを辯ずること詳らかなり。

ここで夏僎が「前に之れを辯じて詳らかなり」というように、泰誓の序に對して夏僎は詳細な論をなして孔傳の「示弱」説の非を論じており、朱祖義は序においては夏僎と異なる説を立てたということになる。

これは、おそらく朱祖義が『尚書句解』を著す際、本文については夏僎『尚書詳解』を利用しておりながら、序文においてはその議論の煩雜さを嫌って明快な孔傳に従ったものと思われる。そうした複數説の混合自體は朱祖義においてしばしば見られることなのであるが、特にこのような重要な問題について直後の部分と學説を統一しなかったことは杜撰であるとされても仕方がない。

しかし、ただの舊注の杜撰な切り貼りに終始するのではなく、朱祖義自身の見識が表れている部分も見られる。

『尚書句解』卷三・禹貢・揚州

陽鳥攸居。

「句解」陽鳥、近澤地名。水退、其地可居。

陽鳥、澤に近きの地名。水退きて、其の地居る可し。

この一句について、從來の注釋者はほぼすべて「陽鳥」を渡り鳥として解釋しており、唯一林之奇『尚書全解』が、突然ここで渡り鳥の話が出てくるのはおかしい、として、『春秋左氏傳』に「死鳥」などの地名が出ることから類推して地名とする。この林之奇の説は傳寅『禹貢說斷』が諸家の説を列舉する中に見られる他にはこの『尚書句解』を除いて言及する者も殆ど見られないものであるが、朱祖義は前後の經文の解釋において夏僎説を用いながらここでは林之奇説に従っている。

朱祖義が文章をより理解しやすくするために解釋を工夫した例がもう一例禹貢の句解に見られる。

『尚書句解』卷三・禹貢・荊州

厥貢羽毛齒革惟金三品、杅榦栝柏、礪砥砮丹、惟箛簞楛、三邦底貢厥名。

「句解」以其非常用之物、雲夢澤之三國致貢其名。庶朝廷知所產之地、有用則須。

其の常用の物に非ざるを以て、雲夢澤の三國は其の名を貢するを致す。朝廷の産する所の地を知りて、用ゐること有れば則ち須めんことを庶ふ。

孔傳や集傳をはじめとする諸注釋は概ね「名」をその地の特産として名高い、という意味で解釋しており、ただ蘇軾『東坡書傳』が「三邦、大國、次國、小國也。杅榦栝柏礪砥砮丹與箛簞楛、皆物之重者。荊州去冀最遠、而江無達河之道、難以必致重物。故使此州之國不以大小、但致貢其名數而準其物、易以輕資致之京師、重勞人也」と、「名」を産品の名稱と讀む説を提示している。これは『東坡書傳』に特徴的な、民衆をいたわる思想であり、蘇軾の經學觀を表す非常に重要な要素であるが、蘇軾が「名」を名稱とすること自體は良いとしても、軽いものに換算して貢納させる、という意見には根據が見出し難く、⁽¹⁷⁾そのため夏僊も反對している。それに引き替え、朱祖義の説においては「以其非常用之物」という揚州「橘柚」への解釋に先例のある論理が根據となつていことから、蘇軾に比してより穩當な説であるということができよう。

實際にこの「三邦底貢厥名」を孔傳や集傳のように讀むと、他の部分には見られない價值評價が突然荊州にのみ表れ、しかも先に品名を列舉した上でそれが名高いことを後ろから述べるといふ點において文章上やや不自然な感じを與えるものであり、この部分の注には朱祖義の、「名」を價值評價を含まない形で讀みながらもできるだけ穩當に解釋したい、という努力の跡が讀み取れるのである。

これらの注釋は、文章の流れが良くなるように經文を可能な限り平易な形で讀む、という朱祖義自身の方針を示している。

解釋の平易さにこだわる朱祖義の説は、特に歴代の注釋者が深遠な意味を見出そうと努めてきた部分の注釋において際立っている。たとえば道學において重視される所謂「十六字心法」については、『書集傳』に先行する夏僊『尚書詳解』等にも詳細な注釋がなされているが、この部分に對する朱祖義の説は他者による經說と一線を劃したかのよう

『尚書句解』卷二・大禹謨

人心惟危、

「句解」奈何人君惟有一心。人欲之役於心者、既危而難安。

奈何んぞ人君惟だ一心有らん。人欲の心に役せらるる者、既に危ふくして安んじ難し。

道心惟微。

「句解」則天理之存於心者、遂微而易泯。

則ち天理の心に存する者、遂に微にして泯び易し。

惟精惟一、

「句解」吾惟精專而不雜、純一而不一。

吾れ惟れ精專にして雜らず、純一にして二つならず。

允執厥中。

「句解」信以執其中道斯可矣。

信に以て其の中道を執れば斯ち可なり。

朱祖義の解釋は、「精」、「一」の解釋に「不雜」、「不二」の語を用いる點が夏僊に似ているものの、「人心」を「人欲」に、「道心」を「天理」に充てるのは、程頤の説に類似する。但し、程頤とも全く同じというわけではなく、朱祖義は努めて抽象的な議論に入り込まないようにしており、特に「義理」や「形氣」など道學に頻出する概念を用いて構造を説明しようとする蔡沈らの姿勢とは大きく異なるものであるということができるのである。

第五節 後世の評価と宋元における中層學問世界

四庫提要は前に述べたように『尚書句解』の教育上の價值を高く評價するが、他方で、その注釋内容や背景についても次のような言及を行っている。

考元史選舉志、延祐中定經義取士之制、尚書以古注疏及蔡沈集傳爲宗。故王充耘書義矜式尚兼用孔傳。迨其末流、病古注疏之繁、而蔡傳遂獨立於學官。業科舉者童而習之、莫或出入。祖義是書、專爲啓迪幼學而設。故多宗蔡義、不復考證舊文。

元史選舉志に考ふるに、延祐中經義取士の制を定むるに、尚書は古注疏及び蔡沈集傳を以て宗と爲す。故に王充耘書義矜式は尚ほ孔傳を兼用す。其の末流に迫り、古注疏の繁を病とし、蔡傳遂に學官に獨立す。科舉を業とす

る者童にして之れを習ひ、出入或る莫し。祖義の是の書、専ら幼學を啓迪する爲にして設く。故に多く蔡義を宗とし、復たは舊文を考證せず。

一體何焯は『尚書句解』が先行注釋を節略したものであることを指摘するのみであり特に何を主とするものであるかについては言及しなかったたのであるが、四庫提要に至って『尚書句解』は蔡沈『書集傳』の系統にある書物とみなされるに至ったのである。

それ以來、『尚書句解』に言及する者はほぼこの提要の語に依據して説を成している。馬宗霍氏は、前にも觸れたように宋末においては道學は「幾ど日中の天の如」きものであつたと述べたが、續いて元代の經學を總括するに當たつて、元代の『尚書』注釋書について、陳櫟・董鼎・陳師凱・朱祖義の名を挙げ、「此皆墨守蔡沈之書者也（此れ皆蔡沈の書を墨守する者なり）」とし、朱祖義『尚書句解』もまた前三者と同じように蔡沈の系統に位置する注釋書であるという見方を示した。⁽¹⁸⁾ 關文瑛『通志堂經解提要』にも四庫提要を踏まえて以下のように述べられる。

謹案、元朱祖義尚書句解十三卷、專爲啓迪幼學而作也。其體不過節取蔡氏舊注、而分釋於各句之下、非有獨到之發明也。誠以元時蔡傳立於學官、業科舉者童而習之、莫或出入。于是祖義一宗蔡傳而著爲是編。⁽¹⁹⁾

謹しんで案ずるに、元の朱祖義の尚書句解十三卷、専ら幼學を啓迪する爲にして作るなり。其の體は蔡氏の舊注を節取し、各句の下に分釋するに過ぎず、獨到の發明有るに非ざるなり。誠に元時蔡傳學官に立てらるるを以て、科舉を業とする者童にして之れを習ひ、出入或る莫し。是こに于いて祖義は一に蔡傳を宗として著して是の編を爲す。

同様に提要に基づく姿勢が甚だ明確なのは王梓材・馮雲濠『宋元學案補遺』であり、その九峯學案補遺には「九峯

續傳」として朱祖義の名を挙げ、専ら『尚書句解』の提要を引いて根據としている。

しかし、前節に見たように、實際に『尚書句解』を精査すれば、四庫提要が示して多くの學者が踏襲してきたこの見方は正確でないことに氣づく。

まず經說の面において、朱祖義は蔡沈に従わないことの方が多く、むしろ蔡沈說の援用はあまり見られない。そのことは、堯典冒頭の「曰若稽古」の解を見ても明らかである。

『尚書句解』卷一・堯典

曰。

〔句解〕史官言。

史官言ふ。

若稽古帝堯。

〔句解〕順考古道而行之者、帝堯。

古の道に順ひ考へて之れを行ふ者は、帝堯。

これは、「曰」を助字とする『書集傳』と全く異なっており、むしろ注釋としては孔傳・正義の踏襲であるといえる。そのことは下に引く注疏の説と照らし合わせれば明らかであろう。

『尚書注疏』卷二・堯典

曰若稽古帝堯。

〔孔傳〕若、順。稽、考也。能順考古道而行之者帝堯。

「孔疏」正義曰、史將述堯之美、故爲題目之辭曰、能順考校古道而行之者、是帝堯也。

正義曰く、史將に堯の美を述べんとし、故に題目の辭を爲して曰く、能く古の道に順ひ考へ校して之れを行ふ者は是れ帝堯なり、と。

むしろ、『尙書句解』が全體として夏僎『尙書詳解』の節略を行っていることについては前節に述べた通りである。では、何故四庫提要はこの書を『書集傳』に基づくものと斷じたのであろうか。それはおそらく、夏僎と蔡沈との説が重なり合っている部分を見て、蔡沈の説の節略であると判斷したのであろう。その判斷の背景には、宋末元初を道學盛行の時代と單純化して捉える偏見があつたのかもしれない。

今、夏僎と蔡沈との説が一致する部分に就いて夏僎『尙書詳解』・『書集傳』・『尙書句解』三者の文章を比較した場合、朱祖義の説が『書集傳』ではなく夏僎『尙書詳解』の節略であることがわかる例が複數存在する。たとえば、舜典に見える「祝敵」について、夏僎『尙書詳解』と『書集傳』とは共に郭璞の説を引いて説明するが、文章の細部は下に擧げるようにやや異なっている。

『書集傳』卷一・舜典

郭璞云、祝如漆桶。方二尺四寸、深一尺八寸、中有椎柄連底撞之令左右擊敵。狀如伏虎、背上有二十七鉏鋸。刻以簞櫟之簞、長一尺、以木爲之。始作也擊祝以合之、及其將終也則櫟敵以止之。蓋節樂之器也。

夏僎『尙書詳解』卷五・舜典

郭璞云、狀如漆桶。方二尺四寸、深一尺八寸、中有椎柄連底撞之令左右擊敵。狀如伏虎、背上有二十七鉏鋸。刻以木、長一尺、櫟之。蓋樂之始作則擊祝以合樂、樂之將終則櫟敵以止樂、故謂合止。

『尚書句解』卷二・舜典

祝狀如漆桶。方一尺四寸、深一尺八寸、中有錐柄、左右擊以合樂於始也。敵狀如虎背、上有二十七鉏鋸。刻以木、長二尺、櫟之、以止樂於終。

ここでは合奏の終わりを合圖するための樂器である故のことが説明されているが、傍線部分を比較すれば朱祖義が蔡沈ではなく夏僎の説に基づいたことは明らかであろう。

以上の點からみて、『尚書句解』は明らかに夏僎『尚書詳解』を基本的な根據として形成され、そして元代に流行したものであると思われる。夏僎『尚書詳解』は南宋期、かなりの影響力をもっていた注釋書である。郝經はモンゴル帝國の使者として南宋へやって來てそのまま拘留され、南宋の文化を體驗した儒者であり、その『續後漢書』卷六十五上下・儒學列傳上下・鄭玄の末尾には經學を總括した一文が存在するが、そこには次のように述べられている。

嗚呼。六經成於孔氏、而傳注備於玄。卒漢四百年之業而收其功、可謂大儒矣。……至宋、易有程氏傳、書有夏氏解、詩有朱氏傳、春秋有胡氏傳、禮有方氏、王氏解。於是六經、傳注于漢、疏釋于唐、議論于宋、聖人之大義備。

眞儒之學、與天地並而立人極焉。

嗚呼。六經は孔氏に成り、而して傳注は玄に備はる。漢四百年の業を卒へて其の功を收む、大儒と謂ふ可し。……宋に至りて、易に程氏の傳有り、書に夏氏の解有り、詩に朱氏の傳有り、春秋に胡氏の傳有り、禮に方氏、王氏の解有り。是に於いて六經、漢に傳注せられ、唐に疏釋せられ、宋に議論せられ、聖人の大義備はる。眞儒の學、天地と並びて人極を焉に立てり。

郝經による『續後漢書』撰述は南宋に拘留されていた時期に係り、この鄭玄傳の記述は南宋最末期の學問狀況を反

映しているのではないかと思われる。提要が延祐年間の詔勅を引いて蔡沈説の當時における盛行を謳うのは、一見非常に説得力のある議論のように映るが、はじめに述べたようにもしも朱祖義を端平二年の舉人と假定するならば、端平二年から科擧が再開された延祐二年まで約八十年間であるから、朱祖義にとってはもはや身後のことに過ぎず、郝經の證言が朱祖義在世中のことを述べているのに正確性において遠く及ばない。

しかし、たとえ南宋末に流行していたとしても、『書集傳』よりも却って議論が煩瑣で文字數だけをとつても優に『書集傳』の二倍以上の分量をもつ『尚書詳解』がなぜ選ばれたのか、ということはやはり考究すべき問題である。

これについては、大禹謨の「十六字心法」などに代表される『書集傳』の道學的な解釋が受け入れられる素地が當時の中層學問世界においては未だ充分に形成されておらず、そのため道學の世界に入り込むことのできない中層知識人たちが比較的即物的な解釋に活路を求めたのではないかと筆者は考えている。⁽²⁰⁾

宋末から元代にかけての『尚書』學においては、一方では董鼎や陳櫟による『書集傳』の解釋を主に朱熹の言葉に據るといふ形態でより深めてゆく方向の流れが存在したが、また一方では經文の道學化を排して、より即物性、わかりやすさを求める朱祖義のような流れも確かに存在した。そしてそれは、時代の第一流の學問ではなかったものの、永樂の三大全の登場に至るまで、學術界において一定の地位を保ち續けたのである。⁽²¹⁾

本研究は JSPS 科研費 JP24K00009 の助成を受けたものである。

注

- (1) 陳用光『太乙舟文集』卷六・重訂讀書分年日程序「乾隆年間、特詔天下郡縣學校頒發此書、以勵學者。嘉惠儒林之意、豈非至優極渥（乾隆年間、特に天下の郡縣の學校に詔して此の書を頒發し、以て學ぶ者を勵ます。儒林を嘉惠するの意、豈に至優極渥に非ずや）」。
- (2) 『三魚堂集』卷四・跋讀書分年日程後。
- (3) 『碑傳集』卷一百二十九・理學下・王箴傳・朱先生澤溪行狀「偶於書肆購得程畏齋讀書分年日程、喜甚、即尋其次序、……無不一一研究（偶たま書肆に於いて程畏齋讀書分年日程を購ひ得、喜ぶこと甚だしく、即ち其の次序に尋ぎて、……一一研究せざる無し）」。
- (4) 『復初齋文集』卷七・攷訂論中之二。
- (5) 馬宗霍『中國經學史』元明之經學（商務印書館、一九三六年、一二八頁）。
- (6) 「隋唐時代「中層學問世界」研究序說」（南京大學古典文獻研究所『古典文獻研究』第十四輯、二〇一一年）。
- (7) たとえば四部叢刊に收録されている參圖互注重言重意本なども、廣い意味でいえば通俗注釋書といえるかもしれないが、それは句讀が施されている、他書・他篇の類似する言說が示されている、という點において科舉用の學習に利便であるものの、經文の字句の理解はあくまでも古注の解釋に委ねているという意味で『句解』などの書物と本質的に異なる。
- (8) 李逸友『黑城出土文書』（科學出版社、一九九一年、二〇一頁）。

- (9) 「黑水城出土『尚書句解』殘頁考」(『西夏學』第四輯、二〇〇九年)。
- (10) 『直音傍訓尚書句解』(中華再造善本、金元編、經部、北京圖書館、二〇〇四年)。
- (11) なお、王天然・馬楠兩氏は黑水城本はその字形や宋諱を避けた痕跡から、宋刊本の覆刻ではないかと指摘する。
「黑水城出土刊本『尚書句解』殘葉小識」(『中國典籍與文化』二〇一四年第二期) 参照。
- (12) ただし四庫全書の著録・存目の判断に際しては必ずしも學術的價值のみが重視されるのではなく、たとえば『論學繩尺』のように文獻的價值の觀點から著録される場合もある。
- (13) 通志堂經解が用いた底本については王愛亭『通志堂經解』底本考論』(『文獻』二〇一一年第三期)が考察を加えている。
- (14) 中華再造善本景印本で墨釘部分がある程度判讀可能であることからわかるように、同じ版本を用いたものであっても個々の印本によってどの程度文字が摩滅しているかということには大きな差異がある。
- (15) 粵雅堂叢書本による。『彙刻書目』所載同じ。
- (16) 『尚書句解』が多く夏僎『尚書詳解』の説を利用していることについては王天然・馬楠前掲論文にもいくつかの實例を用いての指摘が見られる。
- (17) 拙著『三蘇蜀學の研究——北宋士大夫による儒家經典解釋の展開』第二章(京都大學學術出版會、二〇二四年)参照。
- (18) 馬宗霍前掲書、一二九頁。
- (19) 林慶彰・蔣秋華主編『通志堂經解研究論集』(中央研究院中國文哲研究所、二〇〇五年、五四八頁)。

(20) たとえば南宋の李杞『周易詳解』が三蘇蜀學の繼承を念頭に置きながら無意識に道學の價值觀をも反映していることなど、南宋から元にかけての中層での道學受容は複雑な問題を孕んでいる。これについては地域などの要素にも着目してより詳細な研究が俟たれる。

(21) 夏僊『尚書詳解』が影響をもった年代上の下限について、その四庫提要に「明洪武間、初定科舉條式、詔習尚書者、並用夏氏、蔡氏兩傳。後永樂中、書經大全出、始獨用蔡傳、夏氏之書寢微（明洪武間、初めて科舉の條式を定むるに、詔して尚書を習ふ者に夏氏、蔡氏兩傳を並用せしむ。後永樂中、書經大全出で、始めて獨り蔡傳を用ゐ、夏氏の書寢やく微たり）」とあり、清代には同様の記述が多數見られる。ただし、江曦氏は、明初に夏僊の書が科舉で用いられたという言説は楊慎『升庵集』卷三・雲南鄉試錄序に始めて見られるものであり、信賴に値しない、と述べる（「夏僊『尚書詳解』立學官說辨正」（『德州學院學報』第三十二卷第五期、二〇一六年）参照）。明初における夏僊『尚書詳解』の地位については注意が必要かと思われる。